

「性徳尊」

厚生労働委員会 専門員

こばやし ひとし
小林 仁

軽井沢に「塩壺温泉」という古湯がある。弱アルカリ泉の柔らかい泉質で、江戸の頃から、強酸泉の湯治場「草津」の帰り湯として親しまれてきた。東には浅間山の湧水「白糸の滝」を水源とする湯川が流れ、対岸には「野鳥の森」の豊かな緑が広がっている。西は国道146号線を挟んで、軽井沢御用邸が徒歩圏内という場所にある。

かつて、この地を愛し、塩壺の湯を「長命泉」と名づけた人物がいた。湯上りに、流麗な「長命泉」と揮毫した大きな書額が眼に入る。そこには、見覚えのある落款があった。

私の実家はその人の選挙区、三重県にある。築100年を超える古い家で、奥の座敷には、天井と鴨居の間の小壁に、表題の3文字が書かれた額が掛かっていた。戦前の書なので、右から「徳性を尊ぶ」と読む。左端に号「罌堂」の署があった。尾崎行雄である。明治23年の第1回総選挙から連続25回当選、昭和28年までの63年間、衆議院議員の地位にあった。「憲政の神様」「議会政治の父」と呼ばれ、衆議院の正面玄関には胸像が置かれている。

「徳性を尊ぶ」の出典は四書の一つ、中庸の章句第27章。「故君子尊徳性而道問學 致廣大而盡精微 極高明而道中庸 溫故而知新 敦厚以崇禮」である。よく知られた「温故知新」（これは論語が初出）の直前に現れる。我が国でも陽明学の祖、中江藤樹が「畏天命 尊徳性」と用いた。いずれも統治する者、為政者に必要な資質を説いたものであろう。

では、なぜ、尾崎罌堂は選挙区の一有権者に過ぎない祖父に、「徳性を尊ぶ」と揮毫したのか。小さい頃から腑に落ちなかったが、最近になって漸く、その謎が少しばかり解けた気がする。きっかけは、マイケル・サンデルの政治哲学の講義“JUSTICE”であった。

サンデルはハーバードの講堂で、近現代の代表的政治思想を次々と俎上に載せ、学生たちと議論を交わしていく。ベンサム、ミルの功利主義に始まり、ロックの社会契約論、カントの義務論、ロールズの正義論が取り上げられ、それらの難点を明らかにしていく。

意表を突かれるのは、その後である。突然、議論が古代ギリシャ哲学のアリストテレスへと遡るからだ。読者や視聴者は唐突な展開に面食らうが、正に温故知新といってよい。近代的な個人の権利と選択の自由は、政治において並ぶものがない理想であるが、それらは民主主義社会の土台として十分なものだろうか、というのがサンデルの問いかけである。さりとして、徳性についての伝統的な考え方を復活させるだけでは、自己統治のプロジェクトを促進することはできないとも言う。

アリストテレスが「人間は政治的動物である」と言ったのは、人間がコミュニティの中での言論を通じて、善き生、善き社会を築こうとする生き物だということである。ここに求められるのは、聖人君子の「徳」ではない。ポリスの市民に求められる「徳」である。

サンデルは言う。現代に特有の「徳」とは、時に重なり合い、時にぶつかり合う責務の間で、自分たちの進む道を擦り合わせて決めていく力であり、信念を異にする各々の忠誠心によって引き起こされる緊張感と共に生き抜く力なのである、と（『公共哲学』第一章）。

熟議に耐えうる社会、熟議を厭わない政治。罌堂は長命泉に浴しながら、議会政治の理想を夢見た。大正デモクラシーの下、市井の人々が「徳性を尊ぶ」ことに賭けたのである。